国際交流レター

2010 vol.32

International Exchange Letter

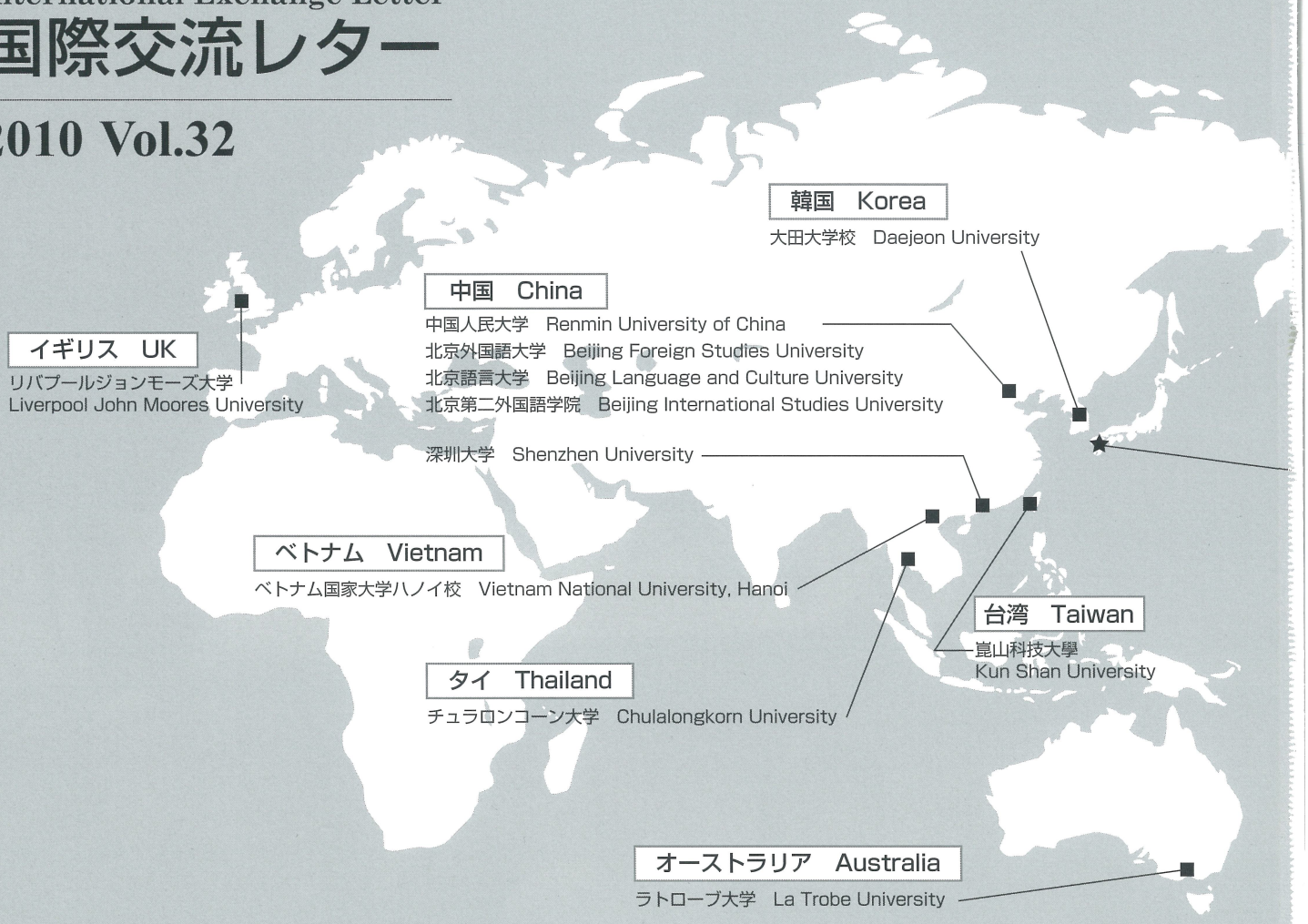
熊本学園大学

KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY

International Exchange Letter

国際交流レター

2010 Vol.32



目　次

学長・国際交流委員長のメッセージ 2

学　長　岡　本　憙　也
国際交流委員長　司　馬　公　周

TOPICS 4

交換留学生、第４回熊本オープンテコンドー選手権大会に出場
第20回外国人留学生弁論大会
大田大学校創立30周年記念式典

留学！ビフォーアフター 6

大山　佐紀（英米学科４年）
鬼塚　朋美（国際経済学科５年）
佐藤　　翼（東アジア学科４年）
William Snider（アメリカ・モンタナ州立大学）
Otis McCulloch（オーストラリア・ラトローブ大学）
Nareevisut Temchum（タイ・チュラロンコーン大学）

交換教員　12

陸　根　和　大田大学校教授（韓国・大田広域市）
馬　敬　仁　深圳大学教授　（中国・深圳市）
土井　文博　商学部准教授　（アメリカ・ミズーラ市　モンタナ大学へ）
香川　正俊　商学部教授　（韓国・大田広域市　大田大学校へ）

卒業生紹介　16

財津　　信（熊本学園大学外国語学部東アジア学科卒業）

国際交流写真館　18

DATA　20

平成22(2010)年　海外往来
平成22(2010)年度　出身国・地域別外国人留学生在籍者数
平成22(2010)年　留学生参加行事
交換教員往来・研修団往来

My international experience
～To speak fluently or to speak eloquently～

学長　岡本憙也

私は言うところの「国際通」です。では先生は英語がペラペラですね、と聞かないでください。馬～鹿な～。ネイティブと同じように、fluently（流暢に）ペラペラとしゃべるなどということはそんなに簡単にはできないのです。「国際通」がそのことを一番よく知っています。またペラペラとしゃべらなくてもよいのです。あえて負け惜しみで言えば、ペラペラしゃべる日本人は日本では妬み半分で軽薄だと思われるのです。

では先生はどこが「国際通」ですか、と重ねて問われれば、私は自慢ではありますが、私はいかなる国の人とでも何時間でも話せる話題を持っていると言うことです。私は日本の諸事万端何事にも通じているのです。もちろんすべて生半可ではありますが。そして、外国のことについてもたいていの国の、大方のことは不正確ではありますが一応知っているのです。私が外国に強い、強い好奇心（curiosity）をもっているからです。

私の英語力は中学、高校の英語で学んだことが基礎になっています。私の英語は純粋な、綺麗な Japanese English です。私は英語圏に１年はおろか、半年も、何カ月も留学したことも、長期滞在したこともないからです。でも私はこの Japanese English で外国人といくらでも話すことができます。繰り返しますが話題が豊富だからです。私はアメリカの国際政治学者と長時間議論したことがあります。私は国際政治に関心が深いのです。彼を家に招待したら、彼が私の妻に、貴女の夫は（つまり先生のことですね）eloquent（雄弁な）ですねと言いました。To speak fluently or to speak eloquently, that is the question!

私は外国人と話せるようになること、国際通になることの要諦、秘訣は話す内容を、話す話題をもっているかということです。貴方達は日本の、世界の、政治、経済、地理、歴史、宗教、文化について日本語で流暢に話せますか。貴方たちは外国に強い、強い関心と興味と好奇心をもっていますか。それがなければ、たとえ fluently におしゃべりできても、eloquently には話せないのです。国際通になるにはまず日本通になってください。そして外国を知らなければ日本を、日本人を深く理解することはできないのです。

バスツアー「かけはし」で宮崎兄弟資料館を訪ねる

海外留学のすすめ
――あいさつにかえて

国際交流委員長　司　馬　公　周

みなさんこんにちは。

昨年１月より国際交流委員長に就任いたしました。

言うまでもなく、今の私は国際交流を推進する立場にいますが、同時に私自身はまた国際交流事業の最大の受益者でもあります。高校時代の日本語との出会いも、後に外国語大学の日本語学科に入学したのもある種の偶然でした。それまではいわゆる学問の「正統」である古典文学に憧れていました。海外への関心が高まるにつれて、つい留学してみたい気持ちが芽生えて、日本政府の奨学金を得たことも手伝って、特に深く考えることもなく来日することとなりましたが、気が付いたら人生の半分を日本で過ごしていました。振り返れば、小学校、中学校、高校、そして大学の間、いろいろな夢を見て、いろいろな人生の将来像を描いてきましたが、日本のこの熊本の地で人生を送る夢だけは、夢にも思いませんでした。憧れの古典文学はついに永遠の「憧れ」となってしまいましたが、おかげで今最もやり甲斐を感じさせてくれる現在の専門分野と出会えたことで、後悔するどころか、大いに満足しています。

担当科目の関係で、現在、私のゼミから毎年海外留学に出かける学生がいて、時には２～３人が同時に出かけて、危うくゼミが成立しなくなるときもあります。教員にとってはうれしい悲鳴です。一年、あるいは二年後、彼（彼女）らはいずれも一まわりも二まわりも（時には体のサイズも同時に）大きくなって帰ってきます。より強く、より逞しく、より冷静になって、そしてより柔軟な心の持ち主となって。再会はいつも楽しいものです。いま、熊本はもちろん、彼らは日本全国、そして世界中に散らばって活躍しています。就職が決まったり、あるいは数年後に再会するとき、彼らはきまって「～語との出会いがなければ、あの夏の海外研修がなければ、今の自分はないはず」と、かつて私が自分の恩師に向かって呟いたことを呟くのです。

本学は学部学科のプログラムも含めて、短期（一カ月前後）、中期（半年）、長期（一年）など、多様な海外留学プログラムを持っています。最初から長期留学を希望する学生もたまにはいますが、多くはむしろいったん短期のプログラムを経験してから、中期や長期に挑戦するのが特徴といえます。特に外国語学部以外の一般学部の学生の多くは、軽い気持ちで短期のプログラムだけでも経験してみるつもりで参加したおかげで、想像をはるかに超える世界の広さを知り、それに驚き、喜び、その魅力に惹かれて、つい長期のプログラムに挑戦するのです。そしてつい、かつての「非日常」が日常となり、私と同じような「期せずして」の人生の繰り返しが始まるのです。

人は夢を見、夢は生きる原動力になります。夢の大きさは経験する世界の広さに比例する、と私は思います。より広い世界を経験し、より大きな夢を見、より多くの選択肢を手にして、そして、より豊かな人生を送ることにつながります。その手段の一つとして、私は海外留学をすすめます。留学は世界を学ぶ機会であると同時に、自己の可能性を発見する機会でもあります。

いま、長く続く経済不況の影響で、多くの学生は海外留学の夢が思うように実現できない状況にあります。現在の実情にあったプログラムの構築は大きな課題の一つです。また、18歳人口の減少に伴い、入学してくる学生も多様化しており、さまざまな層の学生にそれぞれきめ細かく対応していくことは、国際交流のみならず、大学全体が考えなければならない課題だと考えます。「平均的な」プログラムを維持し、確実に運営していくとともに、意欲の高い学生に対してもより満足度の高いプログラムを用意し、本学に対して魅力を感じてもらうことは、本学のような地方私立大学がさらに発展していくうえで不可欠なことだと考えます。

本学の海外留学プログラムが多いに活用されることを期待しています。

交換留学生、第４回熊本オープンテコンドー選手権大会に出場

2010(平成22)年12月５日(日)、阿蘇市で開催された「日韓親善・第４回熊本オープンテンドー選手権大会」に本学テコンドー部に所属するモンタナ州立大学からの交換留学生リチャード・トレバー・クラーク（CLARK, Richard Trevor）さんが出場。会場の阿蘇市体育館には多くの観客がつめかけ、白熱した試合が繰り広げられた。

トレバーさんにとって、日本での試合は初出場となった。「先日、阿蘇でのテコンドー選手権大会に出場したことは、とても素晴らしい経験になりました。巧みな技を持つ選手全員の試合を見ることができ、楽しかったです。この大会には韓国人選手も出場していたので、国境を越えた友情を育むことができ本当に良かったと思います。出場させていただいたことに感謝しています。」と感想を語った。

試合中のトレバーさん(右側)

第20回外国人留学生弁論大会

毎年恒例の外国人留学生弁論大会が2010(平成22)年６月12日(土)、学生会館４階多目的ホールで開催され、今年は６カ国12名の留学生が参加した。会場には学生をはじめ、学内関係者や市民ら約130名の観衆が集まり、熱弁に聞き入っていた。

最優秀賞には、「初めての化粧」をテーマにスピーチをした中国・深圳大学からの交換留学生羅宇晴さんが輝いた。初めての化粧の経験を通して出会った人々や友達のおかげで心の中にあった不安がどんどん消えていき、心が暖かくなっていきましたと語った羅さんは、観衆の投票によって選ばれるオーディエンス賞も獲得した。

＜後列左から＞黄庾那、崔保春、閔孝善、ホアン・タン・フエン、ウィリアム・スナイダー、エマ・セルイン、金鐘龍、ヴィクトーリア・ベネート
＜前列左から＞司馬公周国際交流委員長、薛美擽、テムシュム・ナリウイスット、羅宇晴、王一萍、松永築熊本県観光交流国際課課長補佐(審査員)、松本祐一熊本市文化国際課課長(審査員)

審査結果

最優秀賞・オーディエンス賞	経営学科３年	羅宇晴（ラ ウ セイ）	China（中国）	「初めての化粧」
優秀賞	東アジア学科４年	薛美擽（ソル ミ ラ）	Korea（韓国）	「キムチ」
	国際文化研究科修士１年	王一萍（オウ イチ ヒョウ）	China（中国）	「ボランティア」
敢闘賞	国際経済学科４年	Temchum（テムシュム） Nareevisut（ナリウイスット）	Thailand（タイ）	「タイと日本の違い」
	東アジア学科３年	Hoang（ホアン） Thanh（タン） Huyen（フエン）	Vietnam（ベトナム）	「干支」
	東アジア学科４年	金鐘龍（キム ジョン ヨン）	Korea（韓国）	「あなたを忘れない -日韓の架け橋に-」

大田大学校創立30周年記念式典に参加して

2010年（平成22年）10月30日、姉妹大学である韓国の大田大学校において創立30周年記念式典が挙行された。1980（昭和55）年の創立以来、10月30日には開校式典が開催され、節目を迎える折々にご招待を受ける形で本学から式典に参列してきた。今回もお招きを受けた岩野理事長と岡本学長をはじめとする代表団が大田大学校を訪問させていただいた。

大田大学校の所在地である大田広域市は、面積が540km²、人口が約150万人で、韓国で５番目に大きい都市である。1989年、忠清南道の所属からはなれ、大田広域市として成立した。韓国のほぼ中央に位置し、鉄道、高速道路、国道が分岐する交通の要衝地であり、首都ソウルからは約３時間の場所に位置している。

韓国の大学のキャンパスは、山を切り開いて造られることが多いが、大田大学校に到着してみると、25年前姉妹校提携をした創立５年当時の素朴なキャンパスとはうって変わって、多くの立派な建物が立ち並び、その間を広い道路が走るというモダンで洒落たキャンパスに変わっていた。

ハードの器も立派だが、ソフトの人材面でも感心するところ大だった。各協定校からの訪問団に担当職員一名か二名が随行し、その他にも「韓国滞在中は、私が担当です。」と言って、数名ずつ付いていた学生たちがいろいろ気遣いながら、朝早くから夜遅くまで頑張っていたのには本当に感心させられた。

30周年記念式典も素晴らしかった。式典の第一部では、本学岡本学長が、23ヶ国60校まで増えた姉妹大学を代表して祝辞を述べさせていただいた。第二部は、30周年記念会館の落成式にひき続き、会館内のお披露目があった。理事長室、総長室等と共に事務局窓口が集約されており、教務課、学生課や就職課などの学生支援部門は、オープンフロアー仕様に設計されていた。また、館内にはホテルのようなホールがあり、今回はそこで大変立派な昼食会が準備されていた。昼食会後には、記念式典会場に戻り、韓国伝統芸能を鑑賞させていただいたが、大田大学校芸術学科の林顯璇先生の踊りは本当に見事としか言いようがなかった。林先生ご自身が舞踊団を結成されており、今回は大田市立連政国楽院との共演であった。

姉妹校提携当時は、まだ単科大学の大田大学であったが、その後、総合大学である大田大学校となり、どんどん学生数が増え、附属の韓方病院も全国展開しながら発展してきている大田大学校を見て、本学を振り返ってみると、ここ25年間で本学も同じく「熊本商科大学・熊本短期大学」から「熊本学園大学」へと名称を変更し、四学部体制となり、キャンパスも様変わりして来た。しかし、大田大学校ほどの発展ができてきただろうか？また、大都会へと発展してきた大田広域市と比較して熊本市の発展ぶりはどうだろうか？同様に、日本と韓国を比較しても、韓国の方が日本より発展を続けているように感じた、今回の訪韓であった。

1985年姉妹校提携締結調印式の様子

創立30周年記念会館の落成を祝う

やってみなければ分からない！

外国語学部　英米学科　4年　大山佐紀（おおやまさき）

【2009年9月～2010年1月イギリス・リバプールジョンモーズ大学に短期交換留学】

留学前の私は、留学に対し不安ばかりを抱きマイナス志向でした。たくさん悩み、友人や先輩、国際交流センターのスタッフの方にたくさん相談をしました。そんな私が留学を通じ変われたと思うことは、①以前より物事をはっきりと言えるようになったこと②自分のことは自分で出来るようになったこと③日本に温かい家族、友人がいてくれた当たり前の日々に対する感謝の気持ちが芽生えたことです。

まず、①に関して、私は、声が小さくて聞き返されることが多く相手に物事をはっきりと言えない性格でした。しかし、そんな私の性格は海外で通用はしませんでした。例えば、道や移動の電車が分からなければ、知らない人に自分で聞かなければならない。寮で何らかのトラブルが生じれば電話で問い合わせなければならない。騒がしいパブでも自分から話しかけて友達を作らなければならない。海外では待っていても誰も何もしてくれないので、例え英語でのコミュニケーションに自信がなくても自分から「聞く」「動く」という行為は免れません。また、授業中自分の意見や答えを求められることもありました。ただでさえ英語力が劣る中、小さな声で話していても相手に何も伝わらないのです。これらの経験を通じ、日本に帰国して以前よりもはっきりと物事を言えるようになったように思います。このことは、就職活動の面接やアルバイトの際にも活かされました。

次に②に関して、私は、ずっと実家暮らしでこの留学で初めて親元を離れて暮らしました。それまでは、恥ずかしながらご飯の準備や洗濯は親に頼りきりでした。しかし、イギリスで初めてのホームステイ、寮生活で当然自分のことは自分でやらざるを得ませんでした。朝は自分で起きて朝食の準備をし、学校から帰れば買い物をし、夕飯の準備をしなければなりません。また、週に一回は必ず洗濯をしなければなりませんでした。幸い私は学園大学から一緒に留学した友人と協力して出来たので皆から生活の知恵やお料理をたくさん学ぶことが出来ました。来年社会に出て、１人暮らしをする際にこの経験が必ず役に立つと思います。最後に、③に関して、自分自身が変わったという訳ではありませんが、イギリスに着いて数週間、私はずっとホームシックでした。乗り継ぎのシンガポールを飛び立つ時、いよいよ日本を離れる実感が急に私を襲い飛行機でぼろぼろ泣き、夜ホームステイの部屋の中で一人泣きました。言葉が通じない、皆いない、もう日本に戻れない・・寂しくて、毎日の日本での当たり前の日々がどんなに幸せだったのかを実感しました。言葉が通じること、家族や友人がそばにいてくれることは、本当に感謝すべきことでした。

さて、３年の冬に帰国した私は、留学後もちろん就職活動を控えていました。ここでは紹介していませんが、留学で様々なトラブルを知った私は海外で困っている人の役に立ちたい、私のように海外に行くことに不安を抱えている人にアドバイスや情報を提供して安心して楽しんで頂きたい、私の中にそんな気持ちが芽生えました。それが就職活動の際に企業を決める重要なポイントとなりました。

この留学という経験は、私にとって大きな自信をつける機会となりました。海外で友人を作り、ちゃんと生活し、単位を取得し一人でもちゃんと日本に帰国することが出来ました。あんなに不安の塊でしかなかった私が、留学を乗り越えることが出来たのです。「不安でもやってみなければ分からない！」留学後、私の頭の中にそう刻み込まれました。マイナス志向な私の性格がこれを通し、全く変わったという訳ではありませんが、不安を抱えながらも挑戦する大切さを学びました。

ハロウィーンパーティ（筆者は左端）

My Super Happy Sunshine Fun Days in Australia!

経済学部　国際経済学科　5年　鬼塚朋美（おにつかともみ）

【2009年2月～12月オーストラリア・ラトローブ大学に交換留学】

オーストラリアへの交換留学を通して、自分自身に対する成長や変化が3つあります。

まず1つ目に、世界中の人とコミュニケーションをとる手段としての「英語」を習得出来たことです。中学校からアメリカ英語を勉強していたこともあり、留学前は、アメリカ人以外が話す英語をほとんど理解出来ない状態でした。例えて言うと、イギリス英語の映画を全く理解できなかったという具合です。しかし留学先のメルボルン市は、移民都市でしたのでオーストラリア人が話す英語だけでなく、世界中の人々が話す英語も理解しなければいけませんでした。その為、英語という言葉を聞き取れる音の幅が広がっただけでなく、オーストラリア人は勿論、他国の人々が話す英語の癖もわかるようになりました。そのおかげもあり、帰国後に実用英語技能検定準1級と、TOEIC 805点を取得することが出来たのだと思います。留学を終え振り返ると、特徴ある多くの英語に触れられたことは、これから英語が母国語の人・そうでない人々とも、英語を使って意思の疎通をはかれるという自信にも繋がっています。

2つ目は、時と場合によって、心のバリアーをなくす大切さを学んだことです。街中で地図を広げ道に迷っている人がいたら誰かが声をかけ助ける。バスや市電の中でお年寄りやベビーカーを持った女性がいれば、すぐに手を差し伸べ笑顔で席を譲るといった光景がごく自然で当たり前に人々の中でなされていました。留学前の私だったら、おそらくこういう場面に出くわしても知らん顔をして困っている人に声を掛けられなかったと思います。

しかし今では、バリアーをなくして笑顔で接することが出来ると思います。それが社会の在るべき姿であり、人は支えられ、支えることで生きているのだと強く思ったからです。他人に対して警戒心を抱くことも大切ですが、時と場合によって心を開き、フレンドリーになることもとても大事である、と実感しました。

最後に3つ目ですが、“人”に対する先入観に縛られなくなったことです。留学をする前の私だったら、“～国の出身の人はこうだ”や、“あの人は皆に～と言われているからきっと～だ”というような観念があり、相手と人づきあいをする前から、そういう風に人を見てしまうこともしばしばありました。しかし長期間、生まれた背景が自分と全く異なる人達と共に生活したことで、どれだけ相手や出身国の悪い評判があったとしても、自分が相手ときちんと向き合おうとしない限り、その人のことは絶対にわからないのだと痛感しました。

日本人でも外国人でも関係なく、自分自身が先に心を開き、相手のことを知ろうとする姿勢を持つというモットーを築けたことも、この経験から得たことの1つです。

終わりに、無事に交換留学を終えることが出来たのは、国際交流センターの方や家族、友人など、多くの方々の支えがあったからこそだと思っています。ここでの感謝の気持ちを忘れず、これから還元していけたらなと思います。

メルボルンシティ

ホストファミリーと（筆者は左端）

留学を経験して　～留学の善と今～

外国語学部　東アジア学科　４年　佐藤（さとう）　翼（つばさ）

【2009年３月～2010年１月中国・北京外国語大学へ交換留学】

私は2009年３月から2010年１月まで、中国の北京外国語大学に留学していました。今留学を振り返ると、本当に楽しかったと感じます。私が留学でまず学んだことは、今だけを考えるのではなく、その次を考えるということです。留学に行く前は、ただ留学したいという気持ちが強かったです。本当に自分が留学するという実感が沸きませんでした。しかし、今考えると、この時期にもっと留学について自分で考えておくべきでした。留学中は、全て自分で行動し考えなければいけません。そんな環境の中、何も考えないでただ周りに流されてしまっては、無駄な時間を多く過ごすことになります。自分のやりたいことに費やす時間が無くなります。予定を立てること、先を見て行動することの大切さを感じました。

そんな私は留学から帰国後、すぐに就職活動に取り掛からなければ行けませんでした。そのとき、この留学での経験をいかすことができました。就職活動は常に次を考えて行動しなければいけません。留学で学んだ自己責任による行動、その延長だと感じました。自分から動かなければ何も始まらない、留学での失敗からこれを学ぶことが出来てよかったと思っています。

そんな就職活動で私の一番のアピールポイントとなったのが、中国語でした。留学を通して一番成長したのが語学力でした。北京での１年間の留学を通して、私はHSK（漢語水平考試）９級を習得することができ、留学による語学の向上を何か形にして残すことが出来、本当に良かったです。形に残せたことで、自己満足ではなく他人にも認められる。それを、就職活動で感じました。また、こうして私が就職活動を無事終えられたのも、留学で鍛えられた精神的強さがあったからかもしれません。

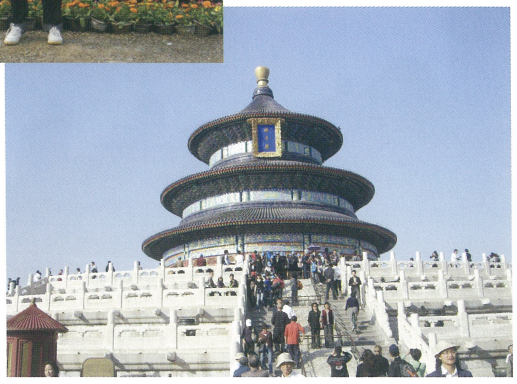
Ｅ５班の友達

私が留学中思ったのは、外国の学生はいろんな情報網を持っていて、学生のうちにいろいろ経験を積んでいることです。留学から帰った私は大学４年生。学生として残された時間は１年しかなく、いろんな経験を積みたいなという気持ちが留学前よりも強くなりました。

今までは、面倒だから他人任せにしていたことや、やったことのないことに関しては避けてきました。しかし、留学がそんな自分のあまい意識を変えてくれました。特に、中国語が関係する事柄に関しては、かなり敏感に反応して行動したくなってしまいます。

そして、留学から帰国した私の今の目標は、中国留学で感じた欧米の人々、または中国人、韓国人のコミュニケーション能力の高さを、自分も実行することができるようになることです。日本人は遠慮しがちですが、人と人とが交流場において、さらには社会生活をするうえで、どれだけ自分を他人にアピールできるか、また、どれだけ他人の意見を知ることができるかがとても重要です。留学という特殊な環境で、１年もの間生活できたことは、多方面での経験を積ませてくれました。学生生活の忘れられない経験です。留学をしたいと思っている人、悩まずに行動してみてください。必ず自分を成長させてくれる結果が待っているはずです。

中国らしいオブジェとともに



天堂公園

Abroad life

ウィリアム　スナイダー
William Snider
【2009年 9 月～2010年 8 月アメリカ・モンタナ州立大学交換留学生】

The differences between who I am now and who I was before going to Japan, I find are appalling. How could I change so much in one year?

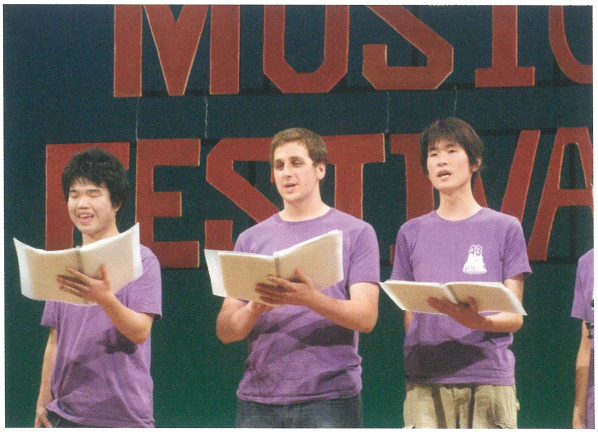
Before Japan I was shy, I lacked confidence in myself and my abilities. I was chubby. Well, more so then I am now, while I was in Japan all of these characteristics changed along with some other smaller changes.

When I first arrived in Kumamoto, I found living there difficult, because I did not really understand the language. It seemed that no matter how hard I tried I could not grasp it, I studied harder and harder. After a few months I was able to communicate with people only using Japanese, which really boosted my confidence.

While in Kumamoto my dad became really sick, and soon after both of his kidneys failed. I was extremely worried, the only thing I could think about was "what if my dad dies while I'm here?" During that time I was ready to pack-up and go home, but my parents did not want me to; they told me not to quit because of him. This was very difficult on me. Because of the situation at home, I started looking up information on transplant surgeries and living with only one kidney. I soon realized that I would have to lose weight if I wanted to give my dad one of my kidneys. Thus, I started working out. Overall I lost about 20 kg in Japan, a lot of my friends have tell me that I lost half of myself in Japan. The weight lose made me feel healthier and help to build my confidence.

Most of these changes I did not notice until I returned to America. I feel much better about life and am not scared to do stuff anymore, even talk in front of people. I have career goals, and I am sure I have what it takes to achieve them. I am excited for life. Other then that I am pretty much the same, I like the same kind of TV shows, the same style of cloths, and the same kind of music. I am continuing my study of Japanese, and hope one day to speak well. I am also studying Spanish, which I am using the same techniques that helped me to learn Japanese. I do plan on returning to Japan sometime in the future.

藍のあまくさ村にて



ミュージックフェスティバルにて

Kumamoto Ben

オティス　マッカロク
Otis McCulloch
【2009年４月～2010年２月オーストラリア・ラトローブ大学交換留学生】

In my last year of University I came to Kumamoto Gakuen University as an exchange student. Before I came to Japan, my Japanese friends would always tell me "the Kumamoto dialect is really strong and hard to understand, you're going to have to try really hard". I thought it was interesting that even Japanese people would say it was difficult to understand, and because of this I started to gain an interest in the Kumamoto dialect. Furthermore, I thought that speaking with the habits of a certain area in Japan would allow me to gain a more natural speaking style. After all, there are no Japanese people who can only speak official Japanese.

When school began I would often hear the people around me using strange words that I couldn't find in the dictionary. For example I would often hear things like *tsutai* and *ken* at the end of sentences. Soon I started asking my friends to teach me the Kumamoto dialect. In exchange I would teach them Australian slang, and slowly I began to understand the Kumamoto dialect. At first I often forgot what I had been taught, so I started to keep a notebook, and would often ask my friends the same question over and over. My teachers would also take the time to explain any questions I had, even though it was unrelated to what we were meant to be studying. Thanks to the help from my friends and teachers I slowly started to understand parts of the dialect.

Eventually I began to pick up parts of the dialect without being taught the meaning, but I would often make mistakes in the usage. Often at times like this even my friends would be unsure as to the exact meaning. However, when I made mistakes my friends would take the time to explain that in that situation a different word would be more appropriate, until they could think of a way to explain the usage, or I would come to understand it on my own.

Travelling around Kyushu I realised that neighbouring states such as Nagasaki and Fukuoka share a similar dialect, though with some differences. Thanks to having learnt the Kumamoto dialect, I was able to understand people from these areas as well, and was occasionally mistaken for a resident in these states. Even as far away as in Osaka I met people who were from Kyushu, and who could tell where I had been from the way I was speaking.

So if you want to improve your Japanese I definitely recommend coming to Kumamoto, and learning the Kumamoto dialect.

with friends（筆者は前列中央）

遊ぶのも勉強になる生活

Nareevisut（ナリウイスット） Temchum（テムシュム）
【2009年９月～2010年８月タイ・チュラロンコーン大学交換留学生】

せっかく日本に来られたのでいろいろなことを勉強したいと思っていましたが、出来るかどうか分からなくて、心配でした。それに授業もどのぐらい理解出来るかも悩みました。しかし日本で十ヶ月間生活して遊びの中でもいろんなことを学べることが分かりました。

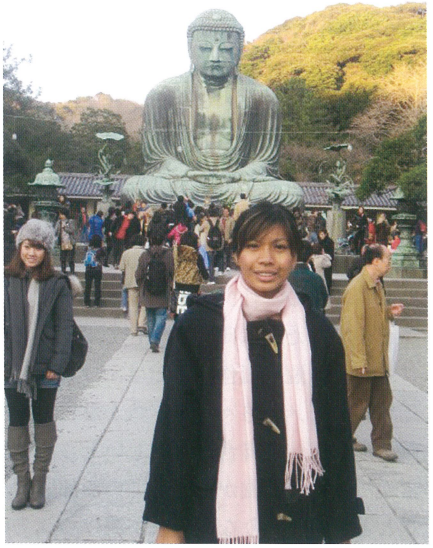
ゼミ旅行に２回参加しました。最初に長崎に行った時は島原と平和公園と原爆資料館を見学しました。実際に見て案内してもらって地域の歴史を勉強できました。自分の目で見て本を読むと、テレビを見るより簡単に納得しました。それに日本人の学生たちと一緒に泊まりに行って日本文化と日本人の性格も知るようになりました。なぜなら、飲んだり喋ったりしたからです。最後のゼミ旅行は人吉で荒瀬ダムと川辺川ダムと武士の家を見に行きました。

ダムの建設についての話題と日本の伝統的なことも習えました。授業に出るより楽しいと思います。ゼミ旅行には日本人の学生だけではなく他の留学生も参加するので異文化を聞かせてくれました。とても面白かったと思います。新しい友達を作られるし勉強も出来るし大変な良い経験になりました。

国際交流センターが行った旅行も本当に良いと思います。去年宮崎の高千穂に行った時も日本人の信仰についても分かるようになりました。日本人は日本の神様が山と森林に宿ると信じています。それで歩いて行ったところは鳥居や神を尊重するための物が並んでいました。日本人が強く信じることを反映していました。あそこは神聖なところだけではなく綺麗な景色のところです。私たちが行った時期は秋なので紅葉も見ました。凄くきれいで感動しました。また、色んな国の留学生に出会えていっぱい話せて良いと思います。今年も阿蘇山に登りに行きました。疲れたんですけど楽しかったです。私にとって今回初めて山に登ったので大変な良い経験だったと思います。友達から助け合ったりお世話になったりして、みんなと一緒に頑張り山の上まで登れて嬉しかったです。学術的な知識を勉強する代わりに社会性を勉強出来たと思います。上まで登った時危ないので気をつけない人は落ちる恐れがあり、しかし皆から優しくして助けてもらって無事に上まで行けました。感謝しています。

それから日本人の友達と遊んだ時も日本語や日本文化も教えてくれました。鹿児島に２回行って来ました。最初は砂温泉と水海館に見に行きました。砂温泉を実際に体験したのは不思議でしたが気持ち良かったです。あそこに行く前は日本の温泉の種類は一つの種類しかないと思っていました。意外に沢山種類があります。大分に遊びに行った時も海地獄と血の池地獄もみました。素晴らしかったです。宮崎に友達の実家に遊びに行った時は青島というところも見に行きました。青島とは海の真ん中にある神社です。遊んだのみならず様々な名物も食べて見ました。例えばチキン南蛮と黒豚も味わってみました。味を感じられただけではなく食文化も勉強になりました。

遊べば遊ぶほど多くのことを学べました。特に日本語と日本文化も勉強になりました。楽しめただけではなく良い経験になりました。色んなことを勉強したくて外国語を早く上達したいならいっぱい遊んだ方が良いと思います。



first glance at Kamakura

歴史と文学、人情溢れる町「熊本」

大田大学校教授　陸（ユック）　根（クンファ）　和

【2009年３月～2010年２月韓国・大田大学校　交換教員】

人には人生で何回か転換期があると言われる。私には、交換教授としての2009年３月５日からの一年間がそれに当てはまるのではないかと思う。東京での留学生活以来の長期間の滞在である。熊本での研究者としての一年間はとても恵まれた時期で、日本を改めて見る契機になった。日本の歴史と文学が一層深く理解でき、日本の方々との付き合いは、人情溢れる町、熊本のイメージを私に与えてくれた。

歴史のまち熊本は、韓国と深い関係があることに驚きを感じる。熊本の象徴である熊本城は勿論のこと、歴史の中で忘れかけている朝鮮文化との出会いがそれである。熊本には蔚山（ウルサン）町という市電の駅があるが、それは韓国慶尚南道の蔚山市と同じ名前である。韓国の蔚山は、1597年加藤清正が築城した城址のある町で、加藤清正はそこで朝鮮・明軍に包囲され、12日間生死の瀬戸際に立ったと伝えられている。熊本の蔚山町はそこから由来し、漢字の表記も発音も全く同じなのである。韓国の蔚山市は人口110万人を超える工業都市に変わったが、熊本の蔚山町駅の周辺は昔の朝鮮の面影をそのまま残していて、そこに立つと祖先たちの声が聞こえてきそうで、悲しさとともに懐かしさが感じられた。

私が熊本に来て意外に感じたのは、熊本城の優れた技術よりも、今でも加藤清正に対する崇拝の念と数多くの行事であった。清正は清正公と呼ばれ、彼を称える神社と大きな銅像、そして３月の本妙寺での桜灯籠祭りで清正を称える歌会は、歴史の光と影が感じられ私には大きな衝撃であった。

朝鮮から伝えられている文化のもう一つは、朝鮮飴である。特に400年余りの秘伝が授けられている朝鮮飴の始祖の園田屋のあることに、歴史の中で綿々と流れている日本人の職人精神に粛然となった。

文学での熊本を含めた九州は、日本近代文学の父である夏目漱石を始め、徳富蘆花、小泉八雲、遠藤周作、松本清張など数え切れないほど多くの作家が活動した土地でもある。その中で、私の専門分野である切支丹文学の作家遠藤周作の作品舞台である雲仙、天草、宇土、長崎、平戸などを訪ねることができたのは研究者として幸運であった。特に外海（ソトメ）の遠藤周作文学館は、はるか五島灘を望む絶壁に建ち、カモメが悠々と飛ぶ豊かな自然に囲まれ、まさに遠藤の「沈黙」の舞台に相応しいところに思われた。作家が平素使っていた碁盤が置かれている部屋は、今でも作家の息吹と苦悩、終わりなき探求が続けられているかのようで、長時間黙想にふけったものである。

昨年、松本清張生誕100年目を迎えた小倉の松本清張記念館では、入館100万人目に当たり、マスメディアの注目を浴びてしまった。近代文学を専攻しているものの、幅広い研究のできていない私としては誠に恐縮な感じがしたのであるが、清張を含め、一年間出会った様々な作家についても研究しようという意欲を甦えさせてくれた。

その他、熊本洋学校教師のジェーンズと、ハンセン病の患者のため一生を送ったリデル、ライト両女史の献身的な生涯にも深い感銘を受けた。

最後に、熊本での日々を思い出すと涙が出そうな多くの方々が思い浮ぶ。韓国への関心と愛情に満ちているＦ先生ご夫妻は、母の急報のため、緊急帰国の際に、博多港まで大変お世話になり、最後まで屋上で手を振ってくださった姿は今でも脳裏に深く刻印されている。故郷まで招待し、日本の文化に直接触れることのできたＳ先生、熊本の味所と娘の将来の相談にまで乗ってくださったＯ先生、韓国のお盆でさびしいだろうとお宅まで招待してくださったＰ先生ご夫妻、教職員ハングル講座で熱心でとても親切であったＦ、Ｎ、Ｙ先生、歴代の大田大学校への交換教授であったＯ、Ｓ、Ｈ、Ｔ先生、色々なアドバイスをしてくださったＲ、Ｓ、Ｎ先生、いつも笑顔で迎えてくださったＨさん、親切に応対してくださった国際交流室のＫさんとみなさん。限られた紙面上、一々列挙できないぐらい身に余るほどの恩を蒙ったあっという間の一年間であった。

熊本から韓国に帰って６ヶ月が過ぎたが、熊本の歴史と文学、そして人情溢れる町、熊本は、今でも私の胸に生き生きと残っている。小西行長は関ヶ原で最後を迎え、‘世の中には変わらないもの何一つない’といったが、私が一年間感じたその温もりは一生変わらないような気がする。

関係者のみなさまに深く深く御礼を申し上げる次第である。

松本清張記念館の100万人目の入館者となり、祝福を受けた陸根和先生（左から２人目）＝2009年12月19日撮影（西日本新聞社提供）

熊本学園記　－忘れられない熊本

深圳大学教授　馬（マ）　敬（ジン）　仁（レン）

【2009年９月～2010年２月中国・深圳大学　交換教員】

熊本学园记事　一难以忘怀的熊本

深圳大学教授　马敬仁

那是 1997 年 9 月到翌年的 3 月，是我第一次作为熊本学园大学和深圳大学的交换教师来熊本的日子，给我留下了许多美好的记忆，终身难以忘怀。

这次（2009.9）又到熊本学园，相隔 12 年，我依然住在原来的水前寺的公寓，风景依旧，人情依旧，室内室外设施依旧，就像又一次回到了阔别己久的家一样，丝毫也不陌生，也不兴奋，平和的心绪使我轻松自如地回想起 12 年前的许多往事，如刚到熊本的兴奋，亚洲金融危机的痕迹，当时的学生部长、我在关学的杰出校友己故的花谷先生，当时的国际交流中心的胜部、田中、西村、切通等知心朋友，还有我去学校的小路两旁的景物，光顾过的小餐馆、咖啡馆、食街、温泉和那美丽的熊本城，还有在课堂上给学生们上课的一幕又一幕……。

是的，这些年来，每到金秋季节，我都会想起初来熊本学园的激动，那静谧的校园折射着自然之美，硕大的银杏树记录着历史之美，简单的人际关系洋溢着和谐之美，特色的教育理念体现着人性之美。

自从我 1986 年第一次踏上日本的国土（关西学院大学），每次来日滞留都有许多新感触新觉悟，以诗词为记：才从江户归，又入萨摩园，日日得充实，不负此生缘。

小路

在熊本水前寺站附近有一条曲曲弯弯的小路，它的一端是我居住的公寓，另一端是我工作的学校，两旁鳞次栉比、错落有致的房子是日本传统与现代的混合物，以及那些随意成片、成行并精心打理的绿化树绿化墙和绿化带，诚如一幅幅优雅的静物诉说着生命的简洁恬静。正是这条不起眼儿的小路，给我许许多多的启示和思索，例如传统和现代的节点？东方和西方的结合点？日本的未来发展之路？中国可借鉴什么？集中和分散的焦点、民主和自由的界限、分工和协作的机制、以及自然精致的设计和物尽其用的管理……。每每走过这条小路，都会使我浮想联翩，不知不觉地回到了现实生活之中。

欢送会

2010 年二月底，我马上就要“暂时”离开我可爱的熊本了，为此，连绵不断的欢送会一个接一个，先是学院大的领导、国际交流中心的朋友、外语学部、商学部等……，说不完离别的话语，缠绵着深厚的友谊，交换着彼此的祝福。

我和我的太太，真心的期待着中国人、日本人明天的生活会更好，期待着熊本学园的明天更美好。

1997年９月から翌年３月にかけてのこと。それは私が熊本学園大学と深圳大学の交換教員として初めて熊本に来た期間であり、一生忘れることのできない多くの思い出を私に与えてくれた日々である。

今回、2009年９月、12年の歳月を経て、私は再び熊本学園大学へやって来た。

また、あの水前寺のマンションに寓することとなり、当時とかわらぬ風景、当時とかわらぬ人情、マンションのうちもそともさして変わらず、まるで長年留守にしていた我が家へ戻ったようである。違和感のない分、さしたる興奮を覚えることもなく、穏やかな気持ちは、いつの間にか12年前の様々なことを回想させるのであった。

12年前、熊本に到着してすぐの興奮、アジア通貨危機の爪痕、当時の学生部長であった故花谷先生のこと。彼は私の関西学院大学時代の傑出した学友なのである。また、当時の国際交流委員長勝部先生、国際交流センターの田中室長、西村くんや切通さんら気のおけない友人たちのこと。そして大学までの通勤路で目にする路傍の風景。かつてよく通った食堂、喫茶店、市内の食堂街、温泉、美しい熊本城。そして教室での授業の一幕、一幕が、あれもこれもと思い出される。

この数年来、秋の紅葉の季節ともなると、私の中に熊本学園大学での感動がよみがえる。静謐なキャンパスにおり込まれた自然の美、銀杏の巨木は歴史の美を記録し、人間関係は協調の美にあふれ、特色ある教育理念は、人格の美をあらわしている。

1986年、関西学院大学への留学のため初めて日本の地を踏んで以来、日本に来るたびに私はいつも新しい発見があったり、悟りを得てきた。

「才従江戸帰　又入薩摩園　日日得充実　不負此生縁」

小路

熊本の水前寺駅付近にくねくねとした小路がある。小路の一端は、私の住むマンションであり、もう一端が大学である。その両端を結ぶ小路には、ずらりと家並みが続く。伝統的な住宅もあれば、モダン様式の住宅もあり、それらが入り混じっている。家並みは、時にかたまりを成し、時に列を成す。よく手の入れられた植木、緑のなす壁や緑地帯は、まさに優雅な静物画の如く生命の簡潔さや穏やかさを訴えている。なんでもない小道であるが、この小路は私に多くの啓示と思索を与えてくれる。伝統と現代の接点とは？東洋と西洋の結合点とは？日本の未来の発展への道とは？中国は何を学ぶことができるのか？集中と分散の焦点、民主と自由の境界線、分業と協働のシステム、そして自然の精密なしくみと物事を有用に動かす上での管理は……。この小路を通るたびに、次から次に様々な思いが浮かび、やがて知らず知らずのうちにまた現実の生活の中へと戻っていくのであった。

歓送迎会

2010年２月末、もうやがて「一時的に」私の愛する熊本を離れなくてはならない。そのため学長をはじめとする先生方、国際交流センターの友人たち、外国語学部や商学部の先生方などから途切れなく送別会のお招きを受けることになった。

別れの言葉は尽きることなく、深い友誼につつまれながら互いに祝福を交わしあったのであった。

私と妻は、中国人と日本人の明日がもっとよりよいものとなることを心から期待し、熊本学園のますますの発展を願うのであった。

高千穂へ向かう車内にて

モンタナの自然に抱かれて

商学部准教授　土井文博（どい ふみひろ）

【2009年９月から１年間、交換教員としてアメリカ・モンタナ大学へ派遣】

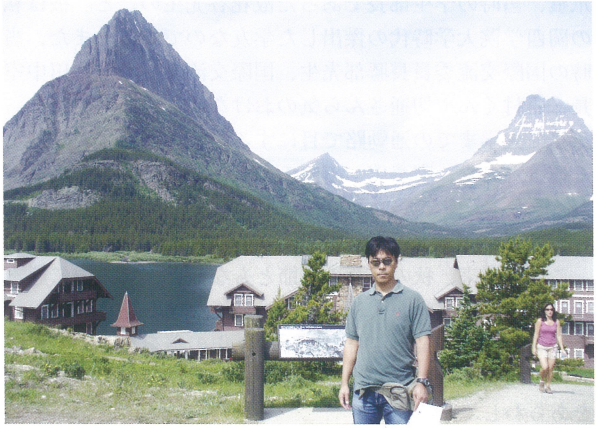
モンタナ大学のあるミズーラはモンタナ州の南西に位置し、カナダから続くロッキー山脈に抱かれている。標高は約1,000メートル。気候は乾燥しており、夏でも木陰ではひんやりとした風がよく通り、肌寒いくらいだが、日差しは強く、まるで肌の焼ける音が聞こえるようである。冬は雪が積もりマイナス20℃くらいになる日もあるが、寒暖を繰り返すため、それほど厳しくはなかった。ミズーラに着いて最初に驚いたのは、周りを取り囲む草山郡である。木々がうっそうと茂る森の姿を想像していたが、阿蘇で目にするような草山が広がっていた。

ミズーラは人口７万程度の街だが、道路はよく整備されており、大型のショッピングセンターやスーパーがいくつもあるなど、想像と比べはるかに都会であった。それでも自然は街のあちこちにあふれており、住宅街の庭は表も裏も芝生で覆われ、街路樹はどこも大きな木ばかりで、そこら中をリスが走り回っていた。シカも時々山から下りて来て、街を散策する。自宅の裏庭に当たり前のように腰かけている姿を見た時にはびっくりした。大学のキャンパスを歩いても、芝生や木々の様子は変わらない。高い建物が少ないため、周りの草山や自然が常に目に飛び込んでくる状況で、自然の大らかさを感じながらの生活であった。その大らかさは人の心にも影響しているようで、人々に余裕が感じられた。その端的な例がスマイルである。他の州はおろか、モンタナ州でもミズーラ限定のように思ったが、見知らぬ他人でも目が合えばほとんどの人が微笑み、言葉を交わすことさえある。ショッピングに行けば、店員と、または客どうして、目が合うたびにニコッである。この習慣に慣れていない私は、当初戸惑いを覚えたが、今ではそれが身についてしまい、帰国した今でも抜けないでいる。

アメリカというと、銃の所持など「危険」な所といったイメージが頭に浮かぶが、モンタナは例外であろう。こうした街がアメリカに存在すること自体に驚き、アメリカやアメリカ人に対する私のイメージは大きく変わった。街で目にする人々も自然に抱かれたこうした生活を楽しんでいるように映る。自然を眺めたり動物と戯れたりする日常があり、お年寄りもきれいに着飾り、外に出かけてはショッピングなどを楽しんでいる。そこでは川の雄大な流れのように時間がゆっくりと流れており、分刻みで追われる日本の生活とのギャップを今感じている。

モンタナで１年を過ごしたが、そのことがもっとも大きく変えたのは、私の人生観かもしれない。自然に抱かれながら、動物の姿や声に触れながら、ゆっくりと流れる時間の中、微笑みを絶やさず時を過ごす。こんな人生の過ごし方もあるのだということを実感した。

子どもが通った小学校の校庭から見る山



グレーシャー国立公園にあるメニー・グレーシャー・ホテルを背に

韓国での生活：一年間にしておけば良かった

商学部教授　香川正俊（かがわ まさ とし）

【2009年９月から半年間、交換教員として韓国・大田大学校へ派遣】

韓国は寒暖の差が余りなく環境に恵まれています。夏は涼しく105年ぶりという寒波が到来した今年の冬もそれ程寒さを感じませんでした。記録的といっても積雪は約５センチ、日本のように湿度が高くないからそれ程積もらないのです。人々も親切でなじみやすくアパートの隣人ともおかずのやりとりをしたり飲みに行ったものです。もちろん、大田大学校の教職員の方々はみんなフレンドリーで昼になると誰かが研究室に「食事に行こう」と誘ってくれるし、夜になれば「飲みに行こう」と言ってくれます。お陰で余り好きではなかったキムチや韓国の焼酎がおいしく感じられるようになり、日本料理は食べずほとんど韓国料理で暮らしました。

日語日文学科での授業は「日本の政治経済」でしたが私語をする人はいません。日本が犯した植民地支配や侵略戦争に対する質問も多く出ましたのでやりがいを感じます。「韓国と日本の関係について」と題する作文を書いてもらったとき「韓日関係の改善に、韓流スターと日本のおばさんが果たした役割が大きい」と書いた学生さんがおりました。日本人は長く韓国に関心を持っていなかったが、韓国と日本の関係を見直す機会を与えたというのです。なるほどと感心させられた次第です。日本人特に若い人達はもっと歴史を知るべきだと思います。「昔の話だし、私には関係ない」ではすまされません。日語日文学科の学生さんは「どうして日本のことを勉強するのか」と自分自身に問いかけているのです。「韓国併合」から100年、私達も真剣に考えましょう。

私は観光旅行が面倒なタチですので、学会等のため観光地近辺に行っても立ち寄りません。韓国での生活も昼食等を除けばほとんど大田大学校とアパートの往復か、スーパーに出かけるかです。けれども、どこにも行かずに帰国すればみっともないと思い、帰国の二ヶ月前当たりから時々「韓国らしい所」を周遊することにしました。観光地ですので大勢の人々がいるのですが、不思議と日本人は見分けがつきます。話しかけるとやはり日本人です。なぜかは今もわかりません。よく韓国人と間違われ、道を聞かれたりしました。韓国語は全然理解できませんので「ハングゴヌンモッタムニダ」(韓国語はできません――正確かどうか知りませんが通じました)。ちなみに韓国人も日本人と同じくカタコトの英語は話せますし、ホテルや観光案内所の人はほぼ日本語ができるから一人旅でも大丈夫だと思います。38度線の非武装地帯は草原が広がり北朝鮮の山々がきれいで、韓国・北朝鮮の人々とは違う複雑な気持ちになりました。鉄道と路線バスを乗り継いで旅行するのは楽しいとはいえないが面白く感じられ、特に路線バスはどの停留所で降りればよいか不安なだけスリルがあります。

韓国はとにかく物価が安い。路線バスや地下鉄は1,000～1,200ウォン（100円以下)、タクシーの初乗り運賃1,400ウォン程度、スーパーの食料品も軒並み安く定年になれば韓国で暮らしても良いかなと考えたほどです。

交換教員として韓国に派遣されることが決まったとき、我が家のカミさんに「一緒に行く？」と聞きました。すぐさま「一人でどうぞ」と予想通りの返事。私と同じくタマには一人でゆっくりしたかったのでしょう。大田大学校の教職員と学生さん、アパートの隣人等との交流はとても有意義だったし、仕事もはかどりました。派遣期間の申請を半年間ではなく一年間にしておけば良かったと今でも思います。

大田市に近い公州の河川近くにて、アパートの隣人と一緒に

「ハノイ、その暮らしの一断面」

熊本学園大学外国語学部東アジア学科　平成19年卒業　財津（ざいつ）　信（まこと）

街のそこら中に湖があり、緑も至る所に溢れている。夏は、うだるような暑さと、体の周りになにかまとわりついているかのような湿気に外出する意欲をなくし、冬は、暖房のない部屋の中、とても東南アジアとは思えないような寒さに身を震わせる。外に出れば、押し寄せてくるバイクの大群をゆるゆるとかわしながら道を渡り、家にいれば、同居のヤモリ君とこんばんは。いい加減で、したたかで、でも、純粋でどこか憎めない人々との、時に真剣で、時に冗談を交えて行われる数々のやり取り…。私は今、そんなハノイに住んでおります。

私が初めてハノイを訪れたのは、2005年のことでした。熊本学園大学の学生研修団に参加させていただき、３月なのにどんよりとした寒空の下、１週間弱の日程で、ハノイ市内や郊外を見て回ったり、協定校であるベトナム国家大学ハノイ校への訪問やホームステイなどを行ったりいたしました。

その後、学園大学に交換留学できていたベトナム人学生との交流や、１週間程度の旅行、さらに、１ヶ月ほどの語学研修などを通して、ハノイとの関わりを深めていきます。

一方、在学中は私、外国語学部東アジア学科に所属して韓国語を勉強していたのですが、４年次のゼミでお世話になった先生の影響で、「移住労働」について関心を持つようになります。折しも、ベトナムは外貨獲得と国内の雇用問題解決のため、政府が労働力輸出に力を入れているときであり、その中で、韓国が主要な輸出先の一つとなっていたものの、そこには様々な問題もありました。

これらを受けて、学園大学を卒業後、運よく拾っていただいた京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻に進学。「ベトナムから韓国への移住労働者送り出しに関する研究」というテーマで研究を始め、ついに昨年10月からは、長期留学のため、ハノイに移住したのでした。

こちらにきて１年以上が経った今、初のハノイ訪問で、至れり尽せりだった学生研修団の頃と比べると、多少はこの街のよりリアルな姿がわかるようになったのではないかと思います。

例えば、ハノイ市民の足として、日々走り続けている路線バス。こちら、運賃が最安で１乗車均一3,000ドン（約12円）という衝撃の値段設定に加え、路線網が市内を縦横無尽に張り巡らされているため、ある意味とても便利な交通手段なのですが、同時に、なぜかバス停に時刻表がなく、さんざん待たされた挙句同じ系統のバスが３台連続してくるという事態や、渋滞がひどいと、運転手さんの裁量によって走行ルートが変わるという事態が発生するなど、なかなか癖のある交通手段でもあります。

ちなみに、この癖は、運行形態だけではありません。

実は、ワンマンバスが登場して久しい日本とは異なり、ハノイの路線バスには、今も車掌さんが乗っております。したがって、基本的には、バスに乗ったら車掌さんに料金を払ってチケットの半券を受け取るというシステムになっているのですが、必ずしも、そううまくいかないことがあるのです。

例えば、一般の乗客に交ざって、車掌さんたちも通退勤で路線バスを利用することがあります。ところが、このときに一つ問題となるのが、彼らが制服を着たままであるということ。おかげで、バスに乗ったら車掌さんが何人もいて、誰に料金を払えばいいのかわからないということが発生します。

また、車内が空いていると、車掌さんも、他の乗客とともに席に座ることがあります。しかしながら、制服がもともと目立つデザインではない上、市バスの内装も暗めのため、バスに乗ったはいいが、車掌さんがどこにいるのかわからないということが起こるのです。特に、冬場など、自前の防寒衣を羽織られた日には、もうお手上げです。完全

平成14（2002）年学生研修団の一員としてベトナムへ
現在は、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に在籍し、ベトナムに留学中

に周囲の乗客の中に溶け込んでしまい、そこから車掌さんを見つけ出すのは至難の業となってしまいます。

とはいえ、いずれのケースも心配する必要はございません。なぜなら、黙っていても、集金のために向こうからやってきてくれるのですから。

また、ここ数年、恐るべき速さで発展が進み、その姿を変えてきたハノイの街。そのような中、以前から存在していた市場に加えて、スーパーマーケットも、徐々にその数を増やしております。

なんといっても、スーパーは、管理がしっかりしていて値段交渉の必要もないのがいいところ。それゆえ、外国人の強い味方ともいえるスーパーなのですが、最初の頃は、日本との違いに驚かされることもままありました。

まず、スーパーに入るときは、大きな荷物を入口付近にあるロッカーに預けなければなりません。これはおそらく、万引き対策なのでしょうが、このシステムを初めて知ったときには、日本のスーパーはなんとお客さんのことを信頼しているのだろうと、しみじみ思いました。

続いて、店内でのお買い物ですが、こちらは日本と同じく、カゴやカートを使って買い物をしていきます。

そして、いよいよお会計ですが、これがちょっと曲者です。というのも、スーパーの値段は100ドン単位でついているのですが、実は、現在のベトナムでは1,000ドン未満の貨幣の流通度合いが低く、レジの中に細かいお釣りがないということがしばしば起こるのです。

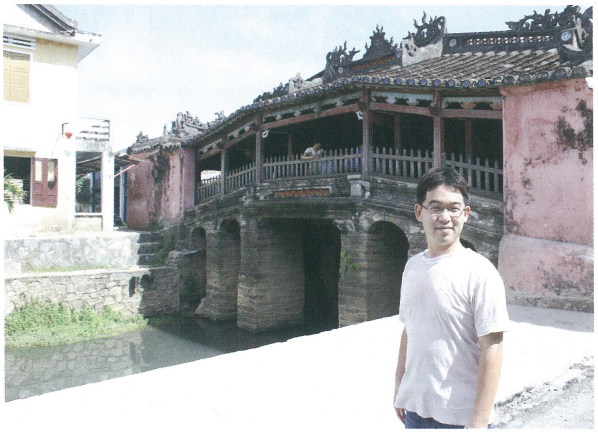
では、そのようなとき、お店の側はどうやって事態を打開するのか。方法としては主に二つあり、一つは、店員さんの裁量で支払額を1,000ドン単位に切り上げ・切り下げる。もう一つは、足りない分のお釣りに相当する飴玉などをお客さんに渡すのです。

正直、最初の頃は、「え～、飴玉なの…」とも思いましたが、さすがに最近は、もう慣れました。目下のところ、この飴玉を逆に支払いで使えないかと思案中です。

日本との、考え方や感じ方、また、物事の進み方の違いなどに、振り回されることもしばしばありますが、同時に、日本ほど窮屈ではなく、どこかおおらかなその雰囲気に、救われることもよくあります。また、日本と比べると、いろいろなものが整っていないため、頭や体を使わなければならない反面、「生きている」という充実感を得ることができるような気もします。

そんなハノイの街と、まだしばらくの間、付き合っていく予定です。

大学生時代、研修団の一員としてベトナムへ（前列左）



現在、ベトナム留学中の筆者

国際交流写真館

Kimono Experience

Sports Day

Kumamoto City Fire Service

Welcome & Farewell Party

Field Trip to Mt.Aso (Eboshi)

Sports Festival

Field Trip

Pottery Making Experience

平成22(2010)年　海外往来

	交換留学生・教員（派遣）	交換留学生・教員（受入）
1月	**北京第二外国語学院**（福山明）、**北京語言大学**（大山絢子）、**北京外国語大学**（佐藤翼）、**大田大学校**（松本莉沙、北村咲紀）、**リバプールジョンモーズ大学**（大山佐紀、後藤好美）帰国 **ユニテックニュージーランド大学**（山下香菜、熊川翼、稲員成美、川鍋愛実）出発	**ラトローブ大学**（オティス・マッカロク、アシュリー・ロースミス）、**セント・メアリーズ大学**（ジョジナ・ゴドフリ）帰国
2月	**リバプールジョンモーズ大学**（右田圭世）、**深圳大学**（松本由希子、出口聡子）帰国 **ラトローブ大学**（中野歌穂、森部真未、阿部央）、**深圳大学**（高井智代、山口桃佳）出発、**北京語言大学**（森田晶子、土屋秀俊）、**北京外国語大学**（池部有咲）、**北京第二外国語学院**（古閑慶子）、**大田大学校**（大坪樹生、佐藤千尋、緒方志保）出発	**大田大学校**（朴淨雅、李慧恩、趙宣貞、尹泰重、柳賢淑、許珉寧、李至愛、朴運姫）、**ベトナム国家大学ハノイ校**（ファム・ホン・ハン）、**深圳大学**（庄妮、肖詩亮）、**北京第二外国語学院**（曹沁鈺）帰国 **大田大学校**（陸根和先生）交換教員、**深圳大学**（馬敬仁先生）交換教員帰国
3月		**大田大学校**（崔柄文先生）交換教員来日 **モンタナ州立大学**（スコット・マーシャル）、**リバプールジョンモーズ大学**（エマ・セルイン）、**大田大学校**（朴惠隣、金鐘龍、閔孝善、薛美擦、李華英、黄庾那、權珠熙、尹銀貞）、**深圳大学**（陳妙雲、羅宇晴）、**北京第二外国語学院**（胡維偉）来熊
4月	**セント・メアリーズ大学**（宇野由紀恵）帰国	**ベトナム国家大学ハノイ校**（ホアン・タン・フエン）来熊
5月	**モンタナ州立大学**（水野可奈子、石倉好貴、上野美世、牧由布志）、**インカーネットワード大学**（中村友規、森淑恵）帰国、**カールトン大学**（冨永理紗）、**リバプールジョンモーズ大学**（小川菜摘）、**チュラロンコーン大学**（田代里紗子）帰国	
6月	**モンタナ大学**（本田愛理）、**セント・メアリーズ大学**（中島美緒）帰国	
7月	**インカーネットワード大学**（小川文子）、**リバプールジョンモーズ大学**（清田航士朗）出発 **ユニテックニュージーランド大学**（稲員成美、川鍋愛実）帰国	**モンタナ州立大学**（ウィリアム・スナイダー、ローレン・オブリー・レリオス）、**キャロル大学**（アレクサ・エチャート、アン・クリスティン・エチャート）、**カールトン大学**（ロバート・レマスワール）、**リバプールジョンモーズ大学**（カーリー・スコサーン、ヴィクトーリア・ベネート、トバイアス・コルトン、エマ・セルイン）、**チュラロンコーン大学**（テムシュム・ナリウイスット）帰国
8月	**モンタナ州立大学**（川口由希子、猿渡有唯、古谷綾香）、**モンタナ大学**（寺岡里紗）、**キャロル大学**（下城崇）、**セント・メアリーズ大学**（宮路弓絵、髙永倫子）、**リバプールジョンモーズ大学**（千々波知子、中川朋美）出発	
9月	**カールトン大学**（松本美紗）、**リバプールジョンモーズ大学**（本庄智美、立岡由妃、小西実加）出発	**モンタナ州立大学**（リチャード・トレバー・クラーク、ジョナ・チンマン）、**セント・メアリーズ大学**（アレクサンドリア・ドゥガール、ジョルダン・ファレル、パトーン・チャトティプソンポル）、**カールトン大学**（ユーセン・リアン）、**リバプールジョンモーズ大学**（イアン・ヒキンソン、ジェニヴィーヴ・ウェイト）、**チュラロンコーン大学**（トゥンラヤー・トゥンワッタナ）、**崑山科技大學**（ゴ・モウホン）来熊
10月		
11月	**ラトローブ大学**（阿部央）帰国	
12月	**ラトローブ大学**（中野歌穂、森部真未）、**ユニテックニュージーランド大学**（山下香菜、熊川翼）帰国	

研修団	その他	
	崑山科技大學（台湾）との大学間交流協定書調印式（学長一行） 1／29（1／28～1／30）	1月
経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）出発2／12 **短期語学ホームステイプログラム**［ラトローブ大学（18名）2／13～3／13］ **短期語学ホームステイプログラム**［ユニテックニュージーランド大学（9名）2／27～3／23］		2月
経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）帰国3／11		3月
	モンタナ大学（アメリカ合衆国）クインシー・アルブレヒト氏、ナンシー・ガス氏来学　4／2	4月
	クライストチャーチ・ポリテクニック工科大学（ニュージーランド）林英樹氏来学　5／31	5月
	ユニテックニュージーランド大学　ニック・シャックルフォード氏来学　6／9 リバプールジョンモーズ大学（英国）　秦健一郎氏来学　6／25	6月
外国語学部海外研修（アメリカコース）出発7／25 経済学部国際事情研修（中国コース）出発7／30 経済学部国際事情研修（韓国コース）出発7／31 外国語学部海外研修（中国コース、韓国コース）出発7／31		7月
経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）出発8／5 外国語学部海外研修（アメリカコース）帰国8／24 外国語学部海外研修（中国コース）帰国8／27 外国語学部海外研修（韓国コース）帰国8／28 経済学部国際事情研修（韓国コース）帰国8／28 経済学部国際事情研修（中国コース）帰国8／30 経済学部国際事情研修（ニュージーランドコース）帰国8／31	第12回学生自治会代表団（韓国・大田大学校）（学生19名、引率4名）受入　8／24～8／26	8月
	インカーネットワード大学およびウィスコンシン大学オークレア校（アメリカ）訪問（国際交流センター事務室長）　9／14～9／22	9月
	韓国・大田大学校創立30周年記念式典（理事長・学長一行） 10／30（10／29～11／1）	10月
	クライストチャーチ・ポリテクニック工科大学（ニュージーランド）訪問（国際交流委員長一行）　11／10、11	11月
		12月

平成22(2010)年度　出身国・地域別外国人留学生在籍者数

春学期

（5月1日現在）

地域	国籍（国・地域名）	学部学生 1	学部学生 2	学部学生 3	学部学生 4	学部学生 計	研究生 学部	研究生 院	研究生 計	大学院生 1	大学院生 2	大学院生 博1	大学院生 博2	大学院生 博3	大学院生 計	留学交換生	合計
欧米	アメリカ U.S.A.										1				1	5	6
欧米	イギリス U.K.															4	4
欧米	カナダ Canada															1	1
アジア	韓国 Korea		1		1	2										8	10
アジア	中国 China	7	9	4	8	28	1	3	4	6	11		1	2	20	3	55
アジア	台湾 Taiwan		1			1											1
アジア	タイ Thailand															1	1
アジア	ベトナム Vietnam															1	1
アジア	ミャンマー Myanmar												1		1		1
	合計	7	11	4	9	31	1	3	4	6	12	0	2	2	22	23	80

【9カ国・地域　80名】

秋学期

（10月1日現在）

地域	国籍（国・地域名）	学部学生 1	学部学生 2	学部学生 3	学部学生 4	学部学生 計	研究生 学部	研究生 院	研究生 計	大学院生 1	大学院生 2	大学院生 博1	大学院生 博2	大学院生 博3	大学院生 計	留学交換生	合計
欧米	アメリカ U.S.A.										1				1	3	4
欧米	イギリス U.K.															2	2
欧米	カナダ Canada															2	2
アジア	韓国 Korea		1		1	2										8	10
アジア	中国 China	7	9	4	8	28	1	3	4	6	11		1	2	20	4	56
アジア	台湾 Taiwan		1			1	1		1							1	3
アジア	タイ Thailand															2	2
アジア	ベトナム Vietnam															1	1
アジア	ミャンマー Myanmar													1	1		1
	合計	7	11	4	9	31	2	3	5	6	12	0	2	2	22	23	81

【9カ国・地域　81名】

※「留学」の在留資格を持っている学生のみ

平成22(2010)年　留学生参加行事

名　　称	主　　催	内　　容	期　日
成人式	日本現代和装研究会	着物の着付けと式典出席	1月11日(月)
第16回 米国人留学大学生との交流会	熊本日米協会	米国人留学生と協会員との交流	1月28日(木)
ユネスコ能楽ワークショップ	熊本ユネスコ協会	能面の体験・仕舞の鑑賞など	2月13日(土)
第28回熊本春節祝賀会	熊本県日中協会	中国人留学生と協会員との交流	2月23日(火)
企業と留学生との交流会	九州経済産業局	企業と留学生との交流	3月15日(月)
ユネスコ文化財を見る会	熊本ユネスコ協会	阿蘇へユネスコ会員との小旅行	3月20日(土)
熊本市広域防災センター見学	熊本学園大学 国際交流センター事務室	防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験	4月5日(月)
新入生歓迎バスハイク	熊本学園大学 国際交流センター事務室	阿蘇烏帽子岳登山・足湯体験	4月17日(土)
ウェルカムパーティー	熊本留学生交流推進会議	バーベキューパーティ	5月16日(日)
本丸御殿コンサート	くまもと全国邦楽コンクール 実行委員会	邦楽コンサート	5月16日(日)
第20回 外国人留学生弁論大会	熊本学園大学 国際交流委員会	本学留学生の日本語による弁論大会	6月12日(土)
ホームステイ体験	城南町フレンドシップクラブ	城南町の家庭へのホームステイ	7月30日(金) ～8月1日(日)
熊本市広域防災センター見学	熊本学園大学 国際交流センター事務室	防災センターで消防事情講話と 地震・台風・火災体験	9月15日(水)
国慶節祝賀会	熊本県華僑総会	中国人留学生を招いての交流会	10月1日(金)
ウェルカムパーティー	熊本留学生交流推進会議	新入留学生との交流会	10月15日(金)
体育祭	熊本学園大学体育常任委員会	体育祭へ参加	10月23日(土)
託麻祭	熊本学園大学第一部学生自治会	学園祭	10月29日(金) ～10月31日(日)
秋の新入生歓迎バス旅行	熊本学園大学国際教育課	蘇陽峡・通潤橋の散策	11月20日(土)
バスツアー「かけはし」	熊本学園大学	宮崎兄弟資料館の見学と陶芸体験	11月23日(火)
千住真理子の クリスマスコンサート	熊本市民会館からのご招待	バイオリンコンサート	12月8日(水)
留学生スポーツ交流会	熊本学園大学第一部学生自治会 学生議会	本学日本人学生と留学生との スポーツ交流と懇親会	12月18日(土)
熊本地区留学生シンポジウム	熊本留学生交流推進会議	日本の餅についてのディスカッション および餅つき	12月18日(土)
熊本県邦楽協会演奏会	熊本県邦楽協会	長唄、琴、尺八、琵琶などの演奏会	12月19日(日)

交換教員往来

チェ ビョン ムン
崔 柄 文先生

（韓国・大田大学校交換教員）
2010年３月から１年間、
韓国語を担当

ほり　まさひろ
堀　正弘先生

（外国語学部教授）
2010年９月から１年間、
交換教員として韓国・
大田大学校へ

こやなぎきみひろ
小柳 公洋先生

（商学部教授）
2010年９月から半年間、
交換教員として中国・
深圳大学へ

平成22(2010)年度　研修団往来

〈受入〉

研修団名	研修期間	団員数
第12回大田大学校学生代表団	８月24日(火)～８月26日(木)	学生15名、引率３名

〈派遣〉

研修団名	研修期間	期間	研修・派遣先	団員数
経済学部国際事情研修ニュージーランドコース	８月５日(木)～８月31日(火)	27日間	ユニテックニュージーランド大学	22名
経済学部国際事情研修中国コース	７月30日(金)～８月30日(月)	32日間	上海外国語大学	６名
経済学部国際事情研修韓国コース	７月31日(土)～８月28日(土)	29日間	韓国外国語大学校	４名
外国語学部海外研修アメリカコース	７月25日(日)～８月24日(火)	31日間	ベセル大学	23名
外国語学部海外研修中国コース	７月31日(土)～８月27日(金)	28日間	吉林大学	11名
外国語学部海外研修韓国コース	７月31日(土)～８月28日(土)	29日間	梨花女子大学校	14名

〈海外への派遣学生数〉

	派遣先大学名	平成22(2010)年度			平成21(2009)年度まで			
		交換	短期交換	HSP*	交換	短期交換	HSP*	短期派遣
アメリカ	モンタナ州立大学	3			54			25
	モンタナ大学	1			20			
	キャロル大学	1			27			22
	ロッキーマウンテン大学							4
	インカーネットワード大学	1			25			
	アワーレディオブザレイク大学（熊本市交流事業）				7			
	ウィスコンシン大学オークレア校				10			
カナダ	セント・メアリーズ大学	2			18			
	カールトン大学	1			9			
イギリス	リバプールジョンモーズ大学	2	4		36	7		89
	アルスター大学				8			19
フランス	リヨン商科大学				2			
	ポワチエ大学				1			
ドイツ	ラインランド・プファルツ州立経済大学							16
オーストラリア	ラトローブ大学	3		13	20		110	
ニュージーランド	ユニテックニュージーランド大学	2	2	15	19	4	65	14
韓国	大田大学校	3			54			
中国	深圳大学	2			44			
	中国人民大学				8			
	北京外国語大学	1			8			
	北京語言大学	2			6			
	北京第二外国語学院	1			4			
	広西師範大学（熊本市交流事業）				9			
台湾	崑山科技大學							
ベトナム	ベトナム国家大学ハノイ校	1			4			
タイ	チュラロンコーン大学				4			
	合　計	26	6	28	397	11	175	189

※注１　網掛けの協定校は、現在交流を行っていない大学　　*短期語学ホームステイプログラム
※注２　短期派遣留学（２カ月派遣）は平成18年度をもって終了し、短期交換留学（１学期派遣）が平成20年度開始。

INTERNATIONAL EXCHANGE PROGRAM COMMITTEE MEMBERS

国際交流委員会メンバー

国際交流委員長 Chair	司馬　公周 SHIBA, Koshi	
商学部 Faculty of Commerce	吉永　心一 YOSHINAGA, Shinichi	波積　真理 HAZUMI, Mari
経済学部 Faculty of Economics	金　栄　緑 KIM, Youngrok	浪本　浩司 NAMIMOTO, Hiroshi
外国語学部 Faculty of Foreign Languages	米岡ジュリ YONEOKA, Judy	柴　　公也 SHIBA, Koya
社会福祉学部 Faculty of Social Welfare	黒木　邦弘 KUROKI, Kunihiro	藤本　延啓 FUJIMOTO, Nobuhiro
国際交流センター事務室 Office of International Programs	喜佐田智子（～2010年10月） KISADA, Tomoko	上田　信行（2010年11月～） UEDA, Nobuyuki

OFFICE STAFF MEMBERS

国際交流センター事務室スタッフ（～2010年10月）

室長	喜佐田智子 KISADA, Tomoko
係長	切通しのぶ KIRITOSHI, Shinobu
係長	矢澤　恵子 YAZAWA, Keiko
	大澤　　孝 OSAWA, Takashi
	大洞　時子 OHORA, Tokiko
	境　亜矢子 SAKAI, Ayako
国際交流会館（事務室）	栗原　隆昭 KURIHARA, Takaaki

国際教育課スタッフ（2010年11月～）

課長	上田　信行 UEDA, Nobuyuki
係長	切通しのぶ KIRITOSHI, Shinobu
	大澤　　孝 OSAWA, Takashi
	大洞　時子 OHORA, Tokiko
	境　亜矢子 SAKAI, Ayako
	栗原　隆昭 KURIHARA, Takaaki

OFFICE HOURS

窓口業務時間

平　日	Monday－Friday	9：00～12：30	13：30～17：00
土曜日	Saturday	9：00～12：30	

CONTACT ADDRESS

問い合わせ先

〒862-8680
熊本市大江２丁目５番１号
熊本学園大学　国際教育課
ＴＥＬ　096-366-3230
ＦＡＸ　096-372-4112

Office of International Education
Kumamoto Gakuen University
2-5-1 Oe, Kumamoto 862-8680
TEL +81-96-366-3230
FAX +81-96-372-4112

E-mail：ip-kgu@kumagaku.ac.jp
ＵＲＬ：http://www.kumagaku.ac.jp/office/kokko/index.htm

※国際交流センター事務室は、平成22(2010)年11月より
国際教育課に名称が変更となりました

※Office of International Programs changed its name to
Office of International Education on November 1, 2010.

平成23(2011)年１月発行

熊本学園大学
KUMAMOTO GAKUEN UNIVERSITY
〒862-8680 熊本市大江2丁目5番1号
TEL 096-364-5161(代)
FAX 096-372-4112
[ホームページ] htttp://www.kumagaku.ac.jp/